沼津市明治史料館通信

二〇一一年一〇月
通巻107号

■シリーズ　市民が語る戦争体験４
　俺なりの戦後処理　植松守男さんの体験談
■夏休みイベントの結果　～こんなことをしました～

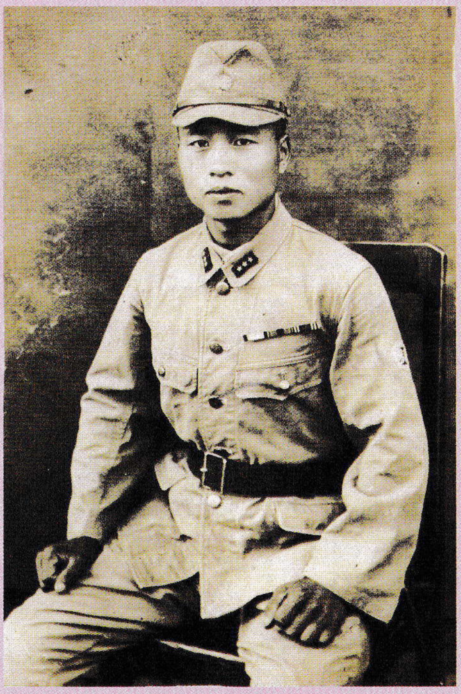
（当館所蔵）

シリーズ　市民が語る戦争体験　4

俺なりの戦後処理

植松守男さんの体験談

植松守男氏略歴
大正九年　駿東郡長泉町下土狩に生まれる
昭和一四年五月　徴兵検査、甲種合格
一五年一月　歩兵第六連隊に入営
中支方面を転戦
二〇年八月　終戦
二一年三月　復員


現役兵当時の植松守男氏

絶対に死ぬじゃないぞ

名古屋の歩兵第六連隊へ入隊したのは昭和一五年（一九四〇）一月一〇日。揚子江から南京北側の浦口に上陸。七年の現役の間に、大きな作戦に一五回参加した。その中で、忘れようとしてもどうしても忘れられないことがある。

いつも作戦に行く時、部隊長や中隊長からは、「立派に名誉ある戦死をしろ」と訓示があった。だが、いざ出発という時、俺は自分の分隊に言っていた。

「死んだら承知しないぞ。死んだら骨は家に行かないものだと思えよ。絶対死ぬじゃないぞ」

部落に近づくと、敵の弾丸の音が聞こえる。小隊長の命令で、各分隊はそれぞれ指示された方向に向かう。

「絶対、固まるじゃないぞ」

分隊の一〇名をバラバラにさせた。

「弾の音をよく聞け」

「立ったら撃たれるぞ」

自分は五年も六年も戦闘の経験があったので兵隊に注意した。分隊一〇名のうち、一人でも怪我をすると、最低二人はそれにかかり戦力が消えてしまう。

河辺三郎は軽機関銃を持っていた。

「河辺、俺にその銃をよこせ」

ひとしきり撃ちまくって

「おい、河辺、今後はお前が撃て。いいか、河辺、頭を出すじゃないぞ。出すと撃たれるからな」

「ハイ」

と、その都度返事をしておった。

激しい銃撃戦になった。コツンと音がした。軽機関銃を持って前を見ていた頭が下がったままだ。

「河辺ッ」

のたって行ってみると鉄カブトに弾丸が貫通した痕がある。鉄カブトをとると、頭蓋骨の外へ腸みたいなものが出てきている。それをたぐっては、頭の中へ押し込み、三角巾で頭を巻き、しっかりしばった。

「河辺ッ、しっかりしろ」

返事はなかった。その河辺を後ろに下げなければと、彼の巻脚絆をほどいて首に巻きつけた。自分も鉄砲や弾を持っているから、片腕で自分のそばまで引き寄せた。どの位引きずったのか、大阪出身の小泉という同年兵がいた。「お前も一緒に引っぱれ」二人で引きずったが簡単にはゆかない。

そればかりに気をとられていたら、敵が今度は後ろへ回ってきていた。これでは両方から撃たれる。

「小泉や、敵に包囲される前に、中隊本部へ行き、報告して弾や鉄砲を渡して戻ってくるからお前ここにいろや」

麦畑を横っとびして中隊本部へとんで行っ

用語解説

歩兵第六連隊
明治七年（一八七四）三月二〇日、名古屋鎮台第六大隊から改編、創設。西南戦争、日清戦争に従軍。名古屋鎮台が改組され第三師団所属となった。日露戦争、シベリア出兵、第三次山東出兵に従軍。昭和九年（一九三四）四月、満州事変後に満州へ派遣。同一二年八月一五日、動員下令、上海呉淞に上陸、以後終戦まで中国各地を転戦した。

小隊長
四個分隊で一個小隊となり、兵員五〇～六〇名前後の編成となる。少尉・中尉が隊長となった。

中隊長
四個小隊で一個中隊となり、兵員二〇〇名前後の編成となる。大尉又は現

た。回りはずっと浅い濠を掘ってその中に入っていた。まもなく、
「分隊長ッ小泉兵長がやられた」
と、連絡があった。
　小泉は、俺が来るまでの間、どれだけでもいい、一人でひきずろうとして半身を起こしたのだろうか。第二ボタンが撃たれたということはそうとしか考えられない。俺は二人の部下を殺してしまった。
　その翌日、畑の燃える物を集めて、指の一かけらも残さないようにきれいに拾って箱に詰め大隊本部に送った。
　河辺は、頭を直撃だから、一口も最期の言葉は聞けなかった。小泉も俺のいないところで胸をまともに撃たれた。それでも、作戦に行く時、「カッチャンよ（今では植松だが、兵隊に行く時には勝俣俺の姓だった）オレ、家に帰る時に姑娘（※クーニャン。中国語で未婚の女性、娘のこと）を嫁にして帰るべえかな。おふくろびっくりするだろうな」
　そんな話が俺の耳に残っている。

やあ　カッチャン来てくれたか

　この戦争に負けて、国に帰るまでの間ずっと考えていた。戦死した二人の墓参りをしない限り、俺の戦後は終わらない。何がなんでも仏さんに手を合わせなければと、二人の住所に何回も手紙を出した。返事が来てくれればいいがなと願い続けた。もう三二、三年経っているのだからこれを最後にしよう、そしてもう諦めようと思った夜、とてつもないことを思いついた。河辺は大森出身だと聞いていたので、大森の電話番号案内へ電話した。
　若い声の交換手に、
「わしはこういうわけで戦死した河辺三郎という人の家族を探しているのです。大森にカワベという姓は何軒あるか、あんた調べてくれないか、わしの頼みをわかってくれますか」
「わかりました」と言ってくれた。
　しばらくして、
「大森には一二軒のカワベという姓の家があります」
「申し訳ないけど、それを片端から繋いでくれ。それであんたはわしの話を聞いていてくれ。これは違うなと思ったら、次のカワベに繋いでくれ」
「わかりました」
「もしもし、河辺さんですか」
実はこういう訳だというと、電話口の女の子が、
「私のお父さんです」
と言った。一番最初に繋がったのが、探していたその家だったので俺はびっくりした。
　大森の駅に着いたら白いハンカチをかけているからなど、打合せしてようやく会えた。
「家に行きましょう」
　駅の近くだった。仏間にかつての河辺の写真があった。手を合わせて
「河辺、すまないことをした。いくら国の為とはいっても君を死なせてしまって申し訳なかった。堪忍してくれよ」
　仏さんに頭を下げてあやまった。
　娘さんに、あなたのお父さんはこういう状態で戦死されました。私は火葬にして骨を拾って全部箱に詰めて送りました。支那には爪のかけらほども残っていませんなどと話した。
　娘さんは涙をポロポロ流しながら、
「おじさん、私、お父さんの顔、知らないんです。お父さんが戦争に行く時、私はお母さんのおなかの中にいたんです」
　驚く俺に、
「おじさん、来てくれるなら去年来てもらいたかった。お母さんが去年亡くなったから」
と言った。
　俺は返す言葉もなかった。どんなにあやまっても、河辺、どうしたら俺を許してくれるのか。許してくれ、許してくれ。おれは何回も頭を下げた。
　それからは大阪の小泉を探すのに必死になった。湯河原での戦友会で会った大阪からの戦友が、大阪で同行して探してくれた。
　仏壇には、小泉が大きな口を開けて笑っていた写真があった。
「やあ、かっちゃん、来てくれたか」
　そう言っているようだった。
　二人の墓参りがすんで、俺にとっての戦後処理は終わった。しかし、あの場面は忘れたいと思っても忘れることはできない。生涯、俺の心を痛め続ける。

役兵当時の植松守男氏中尉が隊長となった。兵隊が身近に接するのは中隊長までであった。

軽機関銃
歩兵の主要武器のひとつ。一個分隊（一三名編成）に一丁配備されていた。三八式歩兵銃の弾丸を使用して三〇発ずつ弾倉に入れる。精密に作られていたので、砂塵などによる故障が多く、「いうこときかんじゅう」と言われるほど銃手泣かせの銃だった。

巻脚絆
布地はラシャ製で兵隊の膝下までを巻いたもの。足が軽くなり、又濡れても乾きが早いという特長がある。兵営内では演習が終わると古兵の号令で競争で脚絆巻きをさせられることがよくあり、初年兵には頭痛の種であったという。

巻脚絆

夏休みイベントの結果　～こんなことをしました～

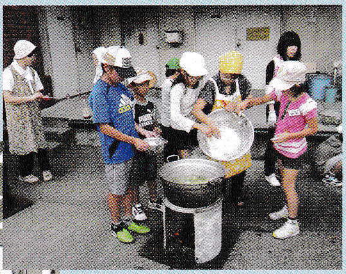
戦時中のくらしを体験しよう

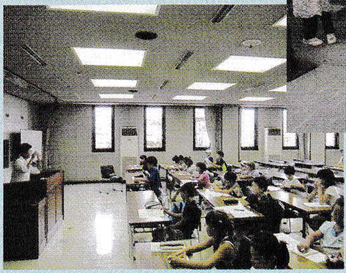
8月3日(水) 実施　21人参加

市内の小学4・5・6年生が参加し、戦時中の話を聞いてからすいとんを作って食べました。

戦時中の話では、昭和20年7月17日の空襲で右足の膝から下を失った岩下さん（当時小学1年生）がどんな辛い思いをしたか、親や周囲の支えで生きてこれたことを感動的に語ってくれました。

すいとん作りは金岡地区のご婦人の協力のもと4つのグループに分かれて、粉をねったり、野菜を切ったり、薪をくべたりとみんな一生懸命にとりくみました。





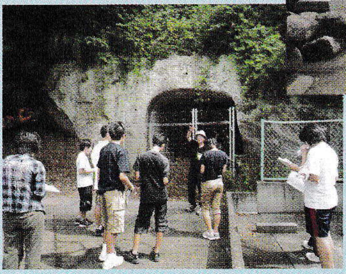
平和を考える戦争史跡めぐり

8月5日(金) 実施　　中学生9人参加
8月7日(日) 実施　親子4組8人参加

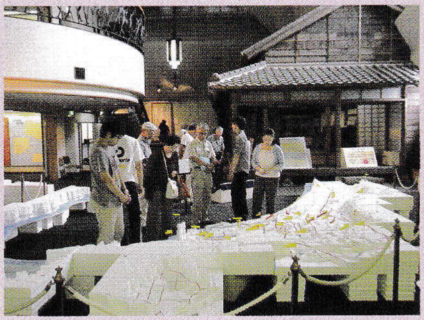
市内の各所に残る戦争史跡をバスで見学しました。

海軍技術研究所址碑（第3中学校付近）を手始めに震洋・海竜の格納壕（江浦）、海軍技術研究所の地下工場跡（多比）、戦時疎開学園の建物（我入道）、高角砲部隊の弾薬庫（中沢田）、拓南神社（足高）、海軍工廠工員養成所跡碑（神田町）などを見学してきました。

参加者からは「沼津が空襲にあったことも、戦争の跡がこんなにあることも知らなかった」という感想が聞かれました。



博物館実習



実習生のギャラリートークの様子

8月24日(水)～ 9月9日(金)の日程で、学芸員資格の取得を目指す学生5名が博物館実習に参加しました。実習では、ぬましんストリートギャラリーで行っている明治史料館館蔵資料展「近世・近代書画名品展」の作品の選定や展示準備、展示などを行いました。他にも企画展「奥駿河湾を襲った地震・津波史料にみる安政東海地震」のギャラリートークも担当するなど、博物館の仕事に実際に携わり、実践的な実習になりました。

お詫びと訂正

通信105号　4ページ
誤「谷田掘」
↓
正「矢田堀」

お詫びして訂正させていただきます。

緊急企画展「奥駿河湾を襲った地震・津波 ― 史料にみる安政東海地震」

会期：8月2日(火)～9月19日(月)　　**好評のうちに終了！**

安政元年（1854）11月4日に起こった大地震による地震・津波について古文書をもとに各地の被害状況を紹介しました。あわせて発砲スチロールで沼津の地形模型を作り、場所ごとに海抜高度を示し、安政地震の際の津波の浸水域を推定して示しました。3月11日の東日本大震災の津波の記憶が生々しいうちで、みなさまの関心も高く、会期中3,539人という多くの方にご観覧いただきました。

また、関連事業として、8月27日(土)に都司嘉宣氏（東京大学地震研究所准教授）に「奥駿河湾を襲った地震・津波検証:明応・宝永・安政東海地震」という演題でご講演いただきました。第1回沼津市防災講座となり、会場の市民文化センター小ホールは満員となりました。

沼津市明治史料館通信
第107号
平成23年10月25日
編集・発行　沼津市明治史料館
〒410-0051 沼津市西熊堂372-1
TEL055 - 923 - 3335
FAX055 - 925 - 3018
印　刷
みどり美術印刷株式会社